昭和49年3月1日発行（毎月1回1日発行）第23巻・第3号　昭和29年6月23日　日本国有鉄道特別扱承認雑誌第2636号　昭和30年3月24日第三種郵便物認可

航空ファン

THE KOKU-FAN

ワイドカラー
WIDE COLOUR

3式戦闘機
飛燕



☆特集☆
変った塗装のファントムとスカイホーク
米空軍のハイパーソニック軍用機計画
09用スケールRC機 "フォッカーD8"

'74 MARCH 3

$3.30



ロールアウトしたYF-16原型1号機

YF-16 Lightweight Fighter Rolled Out



去る12月13日，フォートワースのジェネラルダイナミックス・コンベア部門工場でロールアウトしたYF-16軽量戦闘機原型1号機。前ページ写真では風防を開いているのに注意。



米空軍戦闘機の原型としては,変った塗装でデビューしたYF-16 1号機。まもなく初飛行し,社内飛行テスト機として使われる。特徴ある胴体下の空気取入口が,この写真でよくわかる。

変った塗装のファントムとスカイホーク



変った塗装のF-4Jファントム II。ポイントマグー海軍基地の第4実験開発飛行隊（VX-4）の所属機で、全面グロスブラックに[illegible]　(Photo by [illegible])



F-4J Phantoms of VX-4, NMC Pt. Mugu

上と同じくポイントマグーのVX-4所属機で、上面ライトブルーとブルー、下面ライトグレーの塗装にしたF-4J 6号機(155696)。66ページの解説記事を参照してください。(Photo by S. Tokunaga)



A-4E Skyhawks of Navy Fighter Weapons School at Miramar, Calif.
Photos were taken recently at the Naval Air Facility Washington D.C.

これも変った塗装のA-4Eスカイホーク（150090）で、カリフォルニア州ミラマー基地の海軍戦闘機武器学校の所属機。戦技演習で識別の難易をためすために施されている塗装の一つ。ワシントン海軍航空施設で撮影。（Photo by J. G. Handleman）



同じくミラマーの海軍戦闘機武器学校所属のA-4E（149964）で，海軍の制式塗装以外の迷彩にした1機。下の写真の風防わきに書かれた赤い星は，模擬空戦でのミグ撃墜マーク。（Photos by J. G. Handlman）



空軍のファントムII



F-4F Phantom II of West German Air Force, now in use for Pilot Training at George AFB, [illegible]

カリフォルニア州ジョージ空軍基地で、西ドイツ空軍のパイロットの訓練に使っているF-4F。訓練を担当するのは、同基地の第35戦術戦闘航空団の第20戦術戦闘機乗員訓練飛行隊で、使用機は西ドイツ空軍向けのもの。(Photo by S. [illegible])



F-4D Phantom II (65-738) of 81 TFW, 78 TFS. Taken at the Florennes AFB, Belgium during the Tactical Weapon Meet 1972.

米空軍第81戦術戦闘航空団第78戦術戦闘飛行隊所属のF-4Dファントム II。1972年度戦術武器合同演習に参加したときのもので、ベルギーのフローレンヌ空軍基地で撮影。(Photo by J. P. Poalsted)



前ページと同じくフロリダ [illegible] レンス空軍基地の72年度戦術武器合同演習に参加した米空軍第36戦術戦闘連隊第525戦術戦闘飛行隊所属機。
(Photo by J.P. Pee…)

F-5B of Royal Norwegian A.F.



ノルウェー空軍のF-5B。ノルウェー空軍はF-5A/Bを[illegible]機装備して4個飛行隊を編成している。 Photo by D. [illegible]

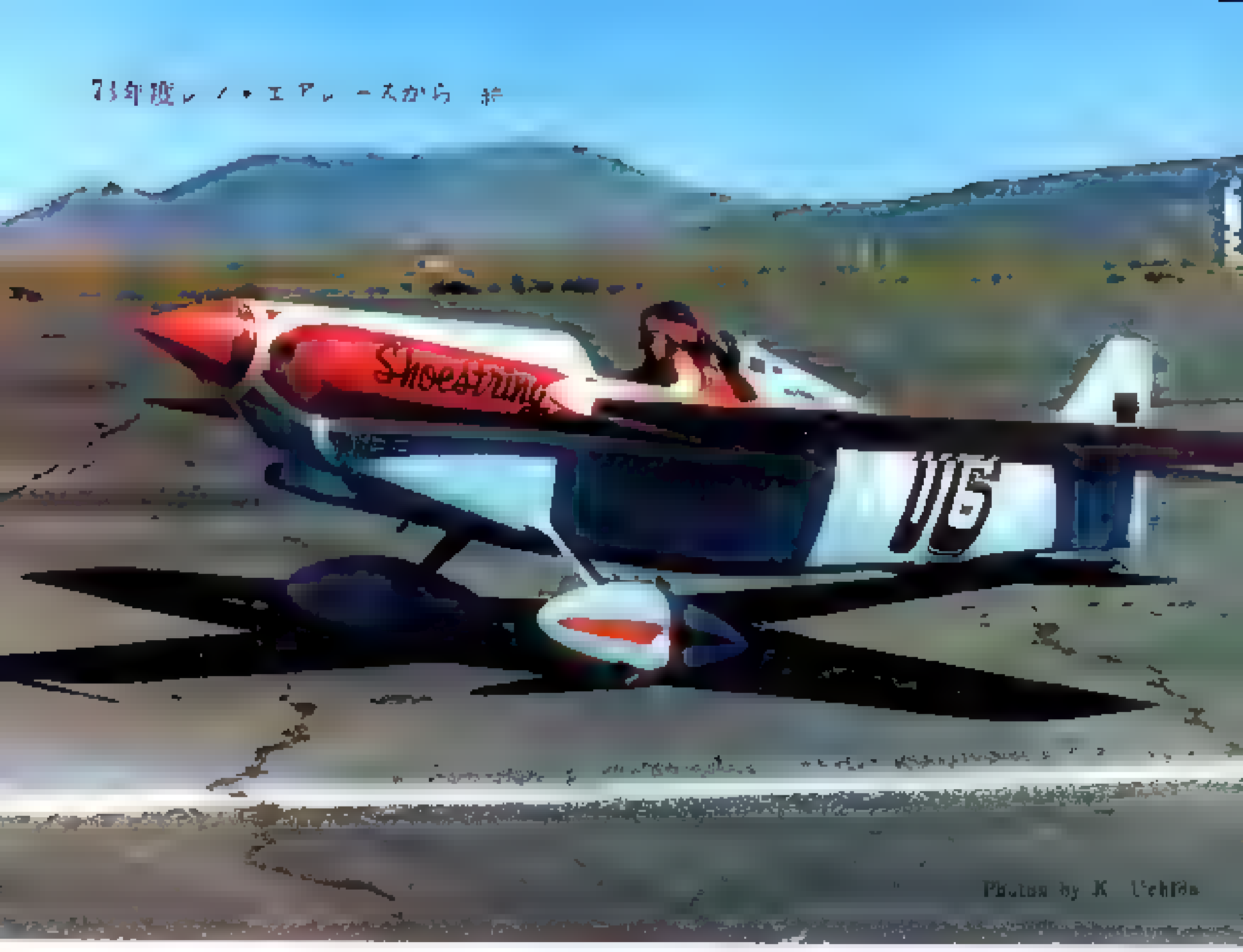


HS Buccaneer S 50, No 24 Sqdn, South African A.F. at Langebaanweg

南アフリカ空軍のHSバッカニアS 50。第24飛行隊の所属機でランゲバーンウェグ基地で撮影。下のページも同じく南アフリカ空軍機[illegible] 376? [illegible]ダーバン基地で撮影。 Photos by [illegible] S[illegible]ersky



Atlas "Impala" MB 326K of South African A F, Durban. South Africa


73年度レノ・エアレースから 続
Shoestring
115
Photos by K. Uchida


LOKI
N15HP


81
N2081
81

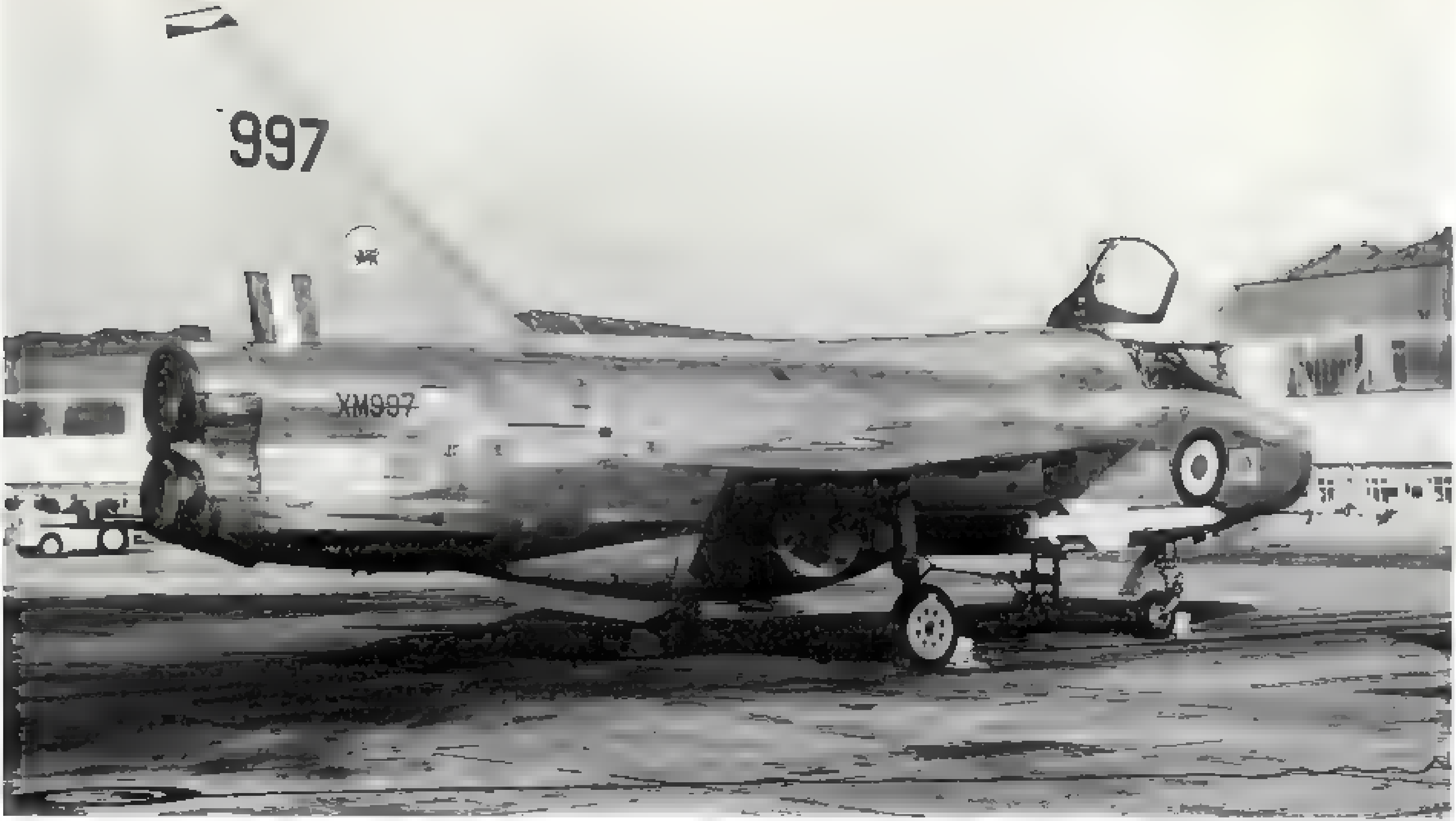

92

グラマンE-2Cホークアイ

Grumman E-2C Hawkeye at Jacksonville NAS, Florida

フロリダ州ジャクソンビル海軍基地で撮影したグラマンE-2Cホークアイ。E-2Aのレーダーを換装して索敵能力を向上させたホークアイの最新型E-2Cは昨年春から第一次量産分[illegible]機の引渡しが開始された。写真は[illegible]第20早期警戒飛行隊[illegible]E-2C[illegible]に配属された量産2号機。[illegible] Press





BA[illegible] T 4

BA[illegible] ghtning T [illegible] of No [illegible] re-e[illegible] squadron

ライト[illegible]グの複座戦闘練習機 4 第226実戦訓練部隊 226 [illegible] の[illegible]
予備役スコ[illegible]トロ[illegible]の所属機 胴体下面[illegible] るのはファイアスト[illegible]
サイル[illegible]英空軍基地で撮影[illegible]

フェアリー・ファイアフライMk.5

Fairey Firefly Mk.5 at Yeovilton

1948年から53年までイギリス海軍航空隊に配備されたフェアリー・ファイアフライMk.5。ファイアフライの戦後型で、朝鮮戦争では軽空母に配備されて、補給路の攻撃や陸上の上陸支援などに活動している。写真の機体は、ヨービルトン海軍基地で現存するもの。（機体 WB271 [illegible]）





Fairchild Industry A-10A ... Edwards AFB

エドワーズ空軍基地で飛行テスト中のA-10Aのクローズアップ。機首に20mm機関砲... 左側... セットされている ... わかる。下の写真ではMk 82 500ポンド爆弾を装備している



全日空の[illegible]登場

All Nippon Airways's first [illegible] 1011 TriStar takes off on its first flight from the Lockheed California Company assembly center [illegible]

[illegible] 2月 [illegible] 日 [illegible] トライスター [illegible] 写真は [illegible] 全日空 [illegible] 2番機 [illegible]





[illegible] … moves first flight

去る2月6日 [illegible] ス工場 [illegible] コンコルド [illegible] 号機 [illegible] エロスパシアルのテストパイロット [illegible] キャプテン [illegible] 操縦で2時間50 [illegible] 初飛行 [illegible]





Boeing 737 on assembly line, final course of production.

[illegible]

[illegible]

[illegible] TriStar delivered to ANA [illegible] ceremony at Palmdale, [illegible]ckheed Company





[illegible] DC-9

[illegible] ↑

[illegible] TDA for Japan domestic services

[illegible] 海上自衛隊 [illegible] ↓

[illegible]



離着艦訓練



三沢のミッドウェー艦上機


203
NF


103
USS MIDWAY
NF

先月号につづいて米攻撃空母ミッドウェー（CVA-41）の搭載機。今回は青森県三沢空軍基地の施設を使って陸着艦訓練中のもので、このほど本誌カメラマンが訪問して撮影した動きのあるスナップである。軍用機パイロットとして最高のスキルを誇る艦上機パイロット。そのウデを保つのはたえまない訓練。空母への着艦は、攻撃や空戦と同様、不断の修練なしでは至難のわざである。

43ページと上2枚は着艦訓練中のF-4NファントムII。第151と161戦闘飛行隊（VF-151,161）の所属機である。〔右・下〕第63軽偵察飛行隊（VFP-63）のRF-8Gクルーセイダー。現在RF-8Gを装備している実戦部隊はこのVFP-63だけで、ミッドウェーには分遣隊として数機を派遣している。





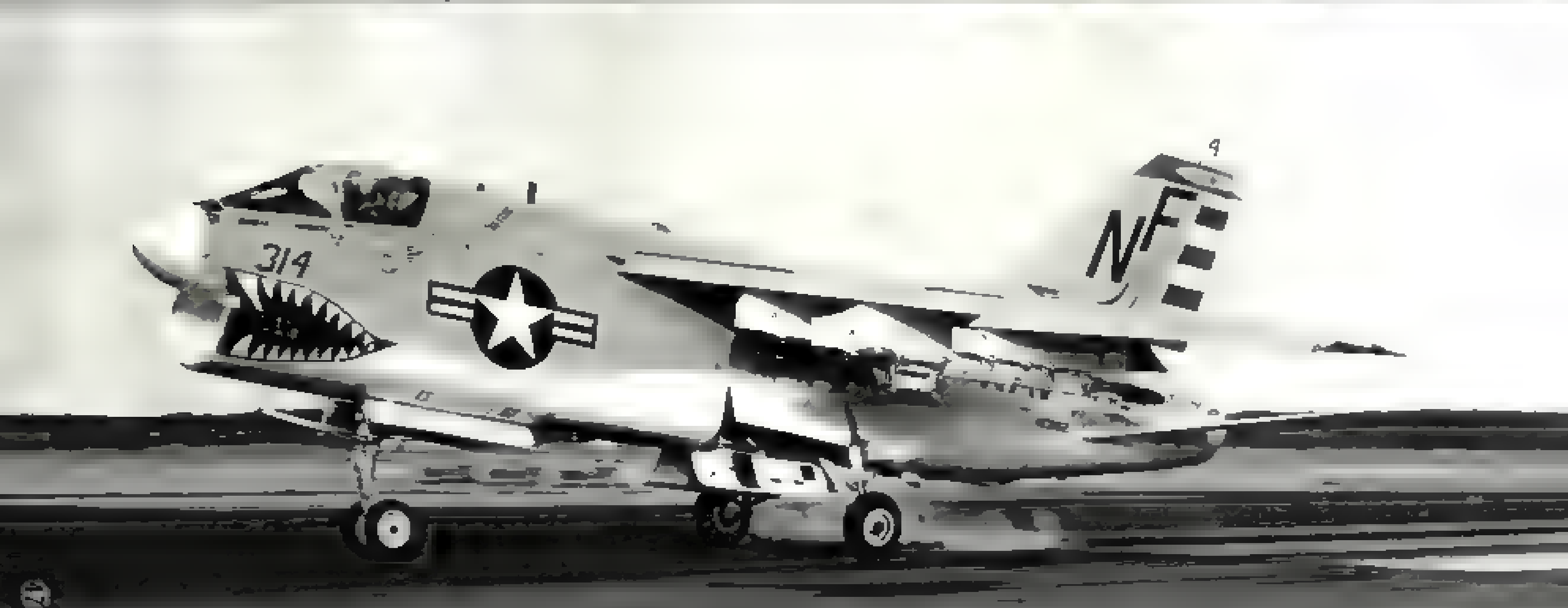


同じく陸上着艦訓練中のA-7Aコルセア II。訓練用の滑走路には空母の飛行甲板と同じように着艦指導灯装置をそなえて"着艦"機を誘導する。着艦進路に入った飛行機は一定の降下角度をたもちながら着艦点に向うが、その角度や方位がズレていた場合は、指導灯は赤の信号を送って着艦をやり直させる。青灯の信号は着艦OK。機は着艦点にタッチしてふたたびゴー。戦闘、攻撃、電子戦機を問わず、艦上機はすべて、腕があがってもたえまなくこの訓練をくりかえす。

写真は第93攻撃飛行隊(VA 93)のA-7Aである。











このページはE-2Bホークアイの離着艦訓練。同じくミッドウェイに配備されている第115艦載早期警戒飛行隊（VAW-115）の所属機。

上の写真に見えるのが着艦指導灯装置。この装置のほかにアレスティングワイヤ（着艦機制動索装置）もそなえて、本格的な着艦訓練を行なうこともある。

Carrier fighters of USS MIDWAY (CVA-41) in "touch and go" training at Misawa AB. Koku Fan Camera, Nov 1973.

沖縄の空の米軍機



このほど沖縄の那覇と普天間両基地で撮影した米軍機。
[上]那覇基地のA-6Aイントルーダー。岩国から飛来した第533海兵全天候攻撃飛行隊・VMA(AW)-533 "ホークス" の所属機。
[下]同じく那覇基地のF-4JファントムIIで、これも岩国に駐留する第232海兵戦闘飛行隊(VMFA-232)"レッドデビルス" の所属機である。

現在、那覇基地に常駐する米軍機は、海軍の第5混成飛行隊(VC-5)のA-4Eスカイホーク、DP-2Eネプチューン、US-2Cトラッカー、SH-3Gシーキング各機で、輪番制で派遣されている哨戒飛行隊のP-3Bオライオン、それに海兵隊の第115攻撃飛行隊VMFA-115もF-4Bを持って配備されているが、ここの写真のように、外来機の飛来も多い。

(Photos: H. Hamano)







（上）那覇基地に常駐する第5混成飛行隊のSH-3Gシーキング。（右）岩国基地をホームグラウンドとする第12司令部付海兵整備飛行隊（H&MS-12）のTA-4Fスカイホーク。那覇基地にて撮影。

（下）嘉手納基地に配備されているSR-71偵察機。戦略軍団の第9戦略偵察航空団（9th SRW）第1戦略偵察飛行隊（1st SRS）の所属機。嘉手納空軍基地には第18戦術戦闘航空団ファントム部隊3個飛行隊とEC-130Eを持った第7特殊作戦飛行隊が常駐しているが、そのほか写真のSR-71もときどき姿を見せている。





U. S. military aircraft those days in Okinawa

[下]輪番制で那覇基地に派遣されているP-3Bオライオン。写真の機体は第19哨戒飛行隊（VP-19，"ビッグレッド"の所属機。



（71ページ本文記事参照）



73年度　リノのエアース ④

Formula I Races, National Championship Air Race Sep 6, 1973

73年度リノのエアレース、今回はフォミュラ―1クラスの出場機。71ページの本文記事にくわしく解説しているように、このクラスはエンジン最大排気量が200立方インチ、主翼面積66平方フィート以上、固定ピッチ・プロペラで固定脚という規定があるが、各自この範囲内で思いっきり改造して、直線では250マイル/時近くのスピードを出している。今回は26機が参加し、レイ・コーテ選手が231マイルのスピードで優勝した。

（上）ピット風景。レース番号21は2位に入ったジョン・ジョーンズのスティンガー。

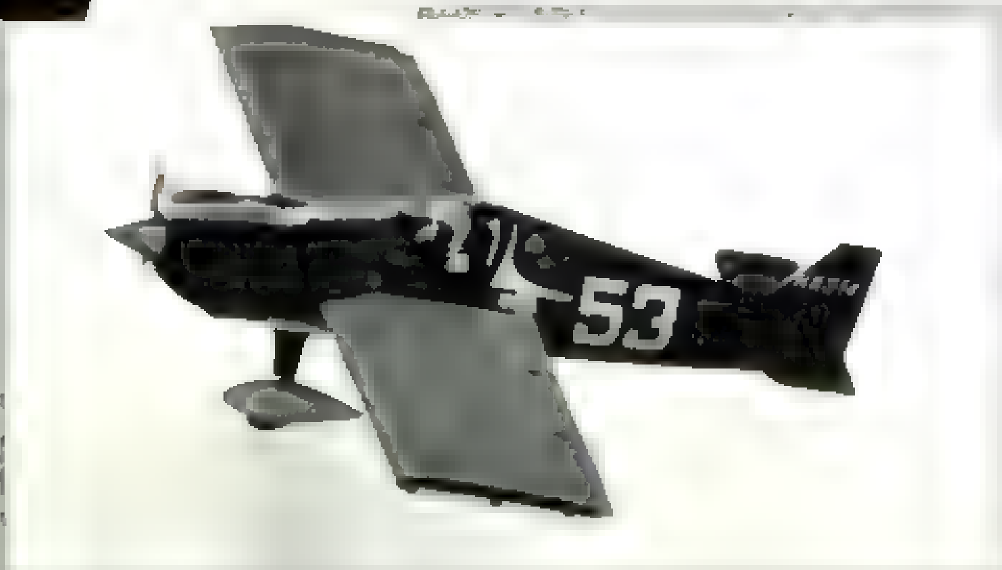
（下）離陸するチャック・アンドリュウス選手の"ムーンシャイナー"。

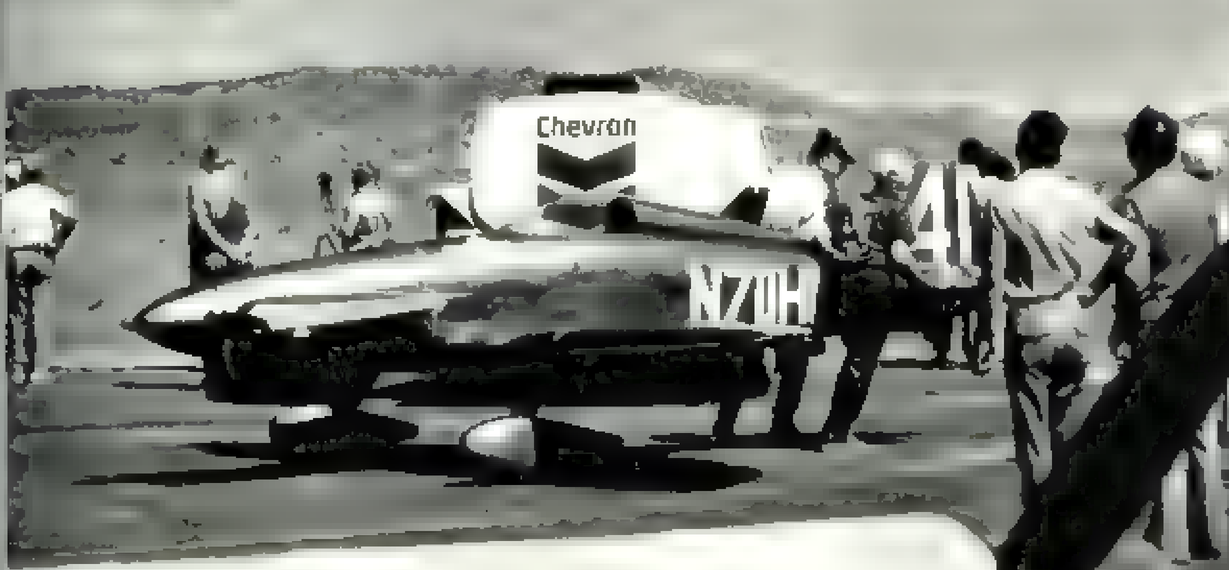






〔上〕6位に入ったドン・ベック選手の"ナット"。
〔上右〕編隊でパイロンをまわるジム・ステバンソン選手の"ファング"(No.11)とアンドリュウス選手機。
〔右〕E・ジョン選手の"セラピイ"。
〔下〕ウイリアム L・スタリア選手のメースR-2 "シャーク"。





フォート ニュース



[上]エドワーズ空軍基地で飛行テスト中のノースロップF-5Eタイガー II 同機はエンジンのフレームアウト問題で、一時飛行を中止していたが、最近再開された。エドワーズ基地で6機による飛行テストがつづけられているほか、アリゾナ州ウイリアムス空軍基地では、20機のF-5Eで南ベトナム空軍パイロットの訓練を行なっている。[下]フェアチャイルドA-10A攻撃機の機首モックアップと新しく装備されるGAU-8A 30mm機関砲。地上発射テスト用モックアップで、テストは12月初めからバーモント州のバーリントン射場で行なわれる。



〔右〕コホーテク彗星観測用としてこのほど改造されたロッキードC 141輸送機。主翼付根前方に開いている四角の観測窓には、直径36インチの赤外線望遠鏡がそなえつけられている。

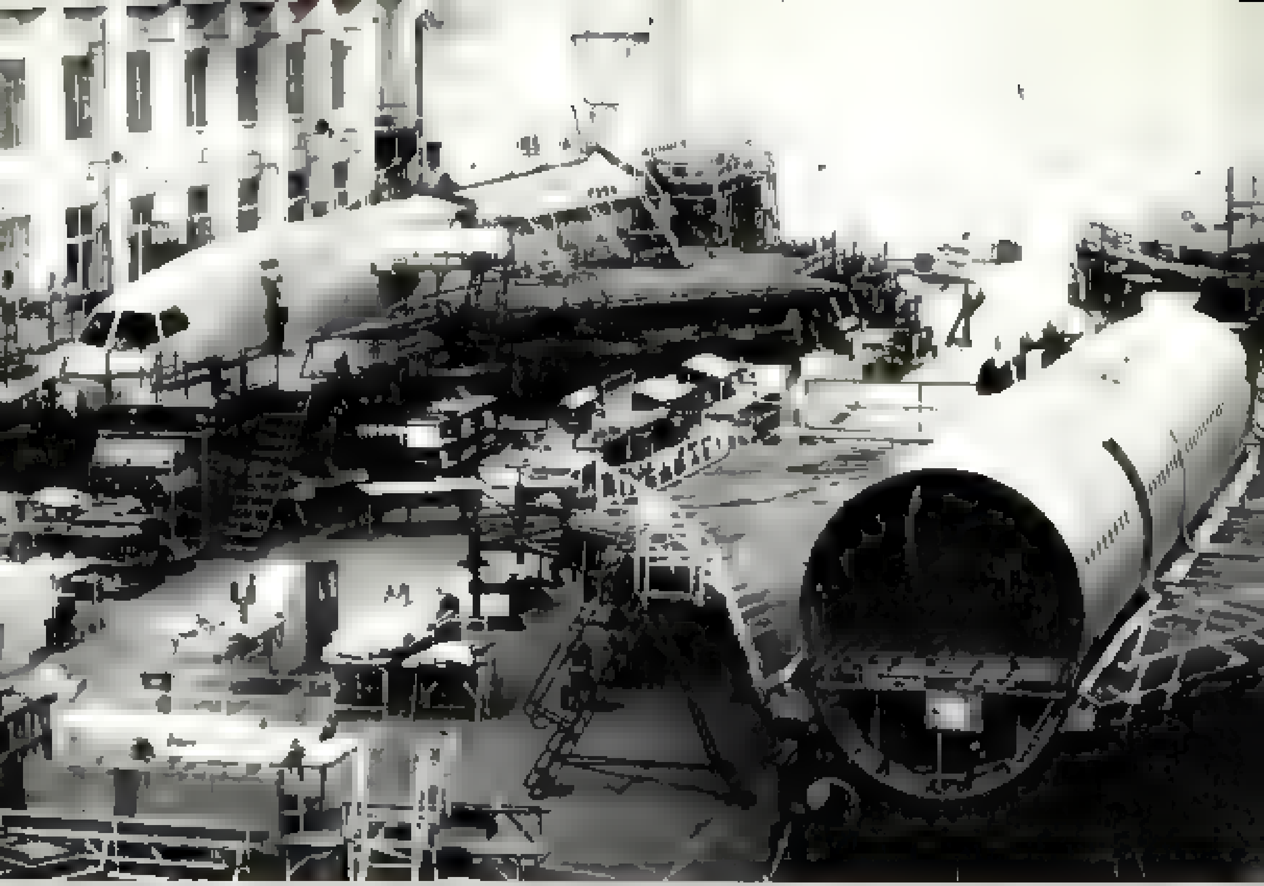
〔下〕トラックの空輸に動員されたアルゼンチン空軍のC 130。チリー政府が購入した200台のトラックをアルゼンチンから空輸したもので25回の飛行で空輸を完了した。





〔下〕ワシントン州ボーイング・レントン工場でこのほどロールアウトした1 000機目のボーイング727。これまで本機を発注した54の航空会社のマークをつけて工場からひき出されたところ。現在までの727発注機数は1 093機。





〔上〕コンコルドの量産ライン。写真はフランスのツールーズにあるアエロスパシアルの最終組立て工場。左端はコンコルドの量産5号機でエールフランス向けの1番機となる機体。11月末現在で70パーセント以上の組立て作業を終えており、各種システムの取りつけも始められている。右手前は量産7号機の胴体中央部と主翼で、英国のBACから送られてくる前・後部胴体が取りつけられる。右後方では11号機の組立ても始められており、コンコルドの量産もいよいよ軌道についたという感じである。



スナップ だより



(上)，崎航空機岐阜工場でテスト飛行中のKV-107IIヘリコプタ。写真の機体はスウェーデン向けの5号機である。(豊田市・丹羽八十)



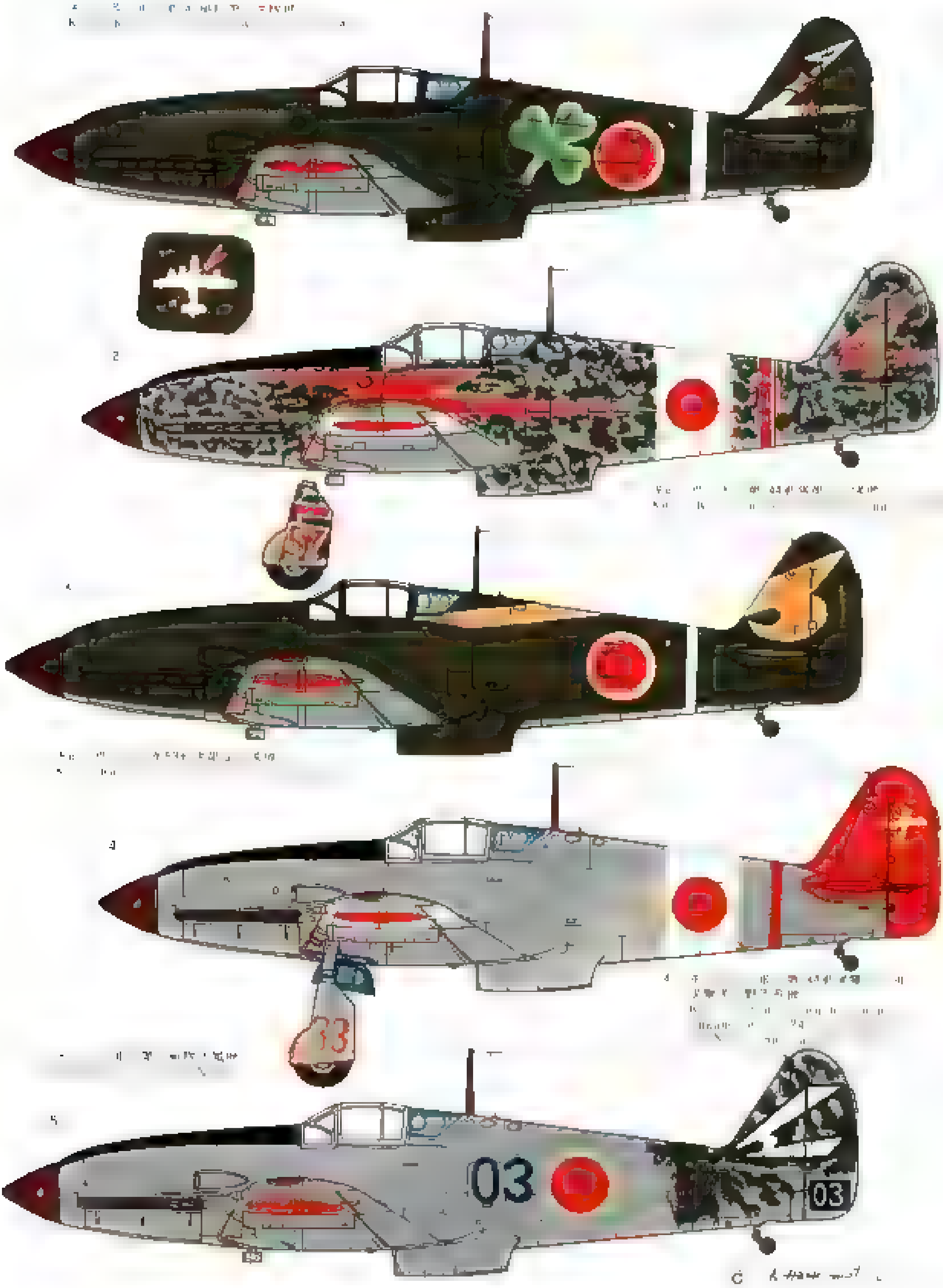
(左)12月1
日よりDC-
-63に代って
バンクーバー
東京 香港
線 就航した
CPエア・カ
ナダ太平洋航
空のボーイン
グ747ジャン
ボ機。同航空
の747の就航
で 羽田には
9社の外国航
空会社のB7
47が顔をそろ
えることにな
った。(武蔵
野市・井上
雄)

(下)昨年(昭和48年)秋 新潟空港に飛来したアエロフロートのアントノフAn-12。An-12はソ連をはじめ共産国で軍用輸送機として使われているが、これは尾端の銃座をはずした民間型。(新潟市・石井公郎)



ワイドカラー
WIDE COLOUR

KAWASAKI KI61 1 "HIEN"

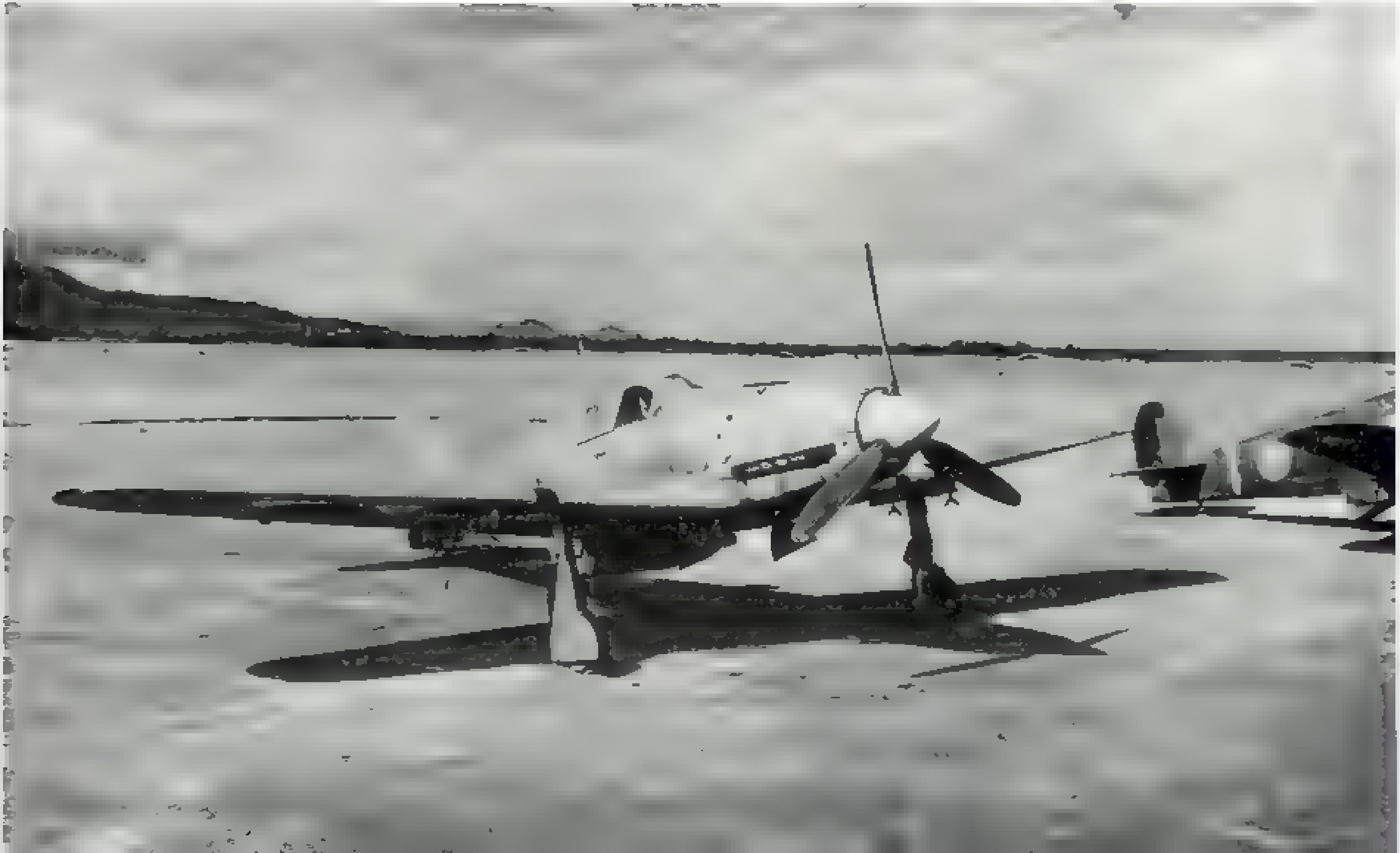




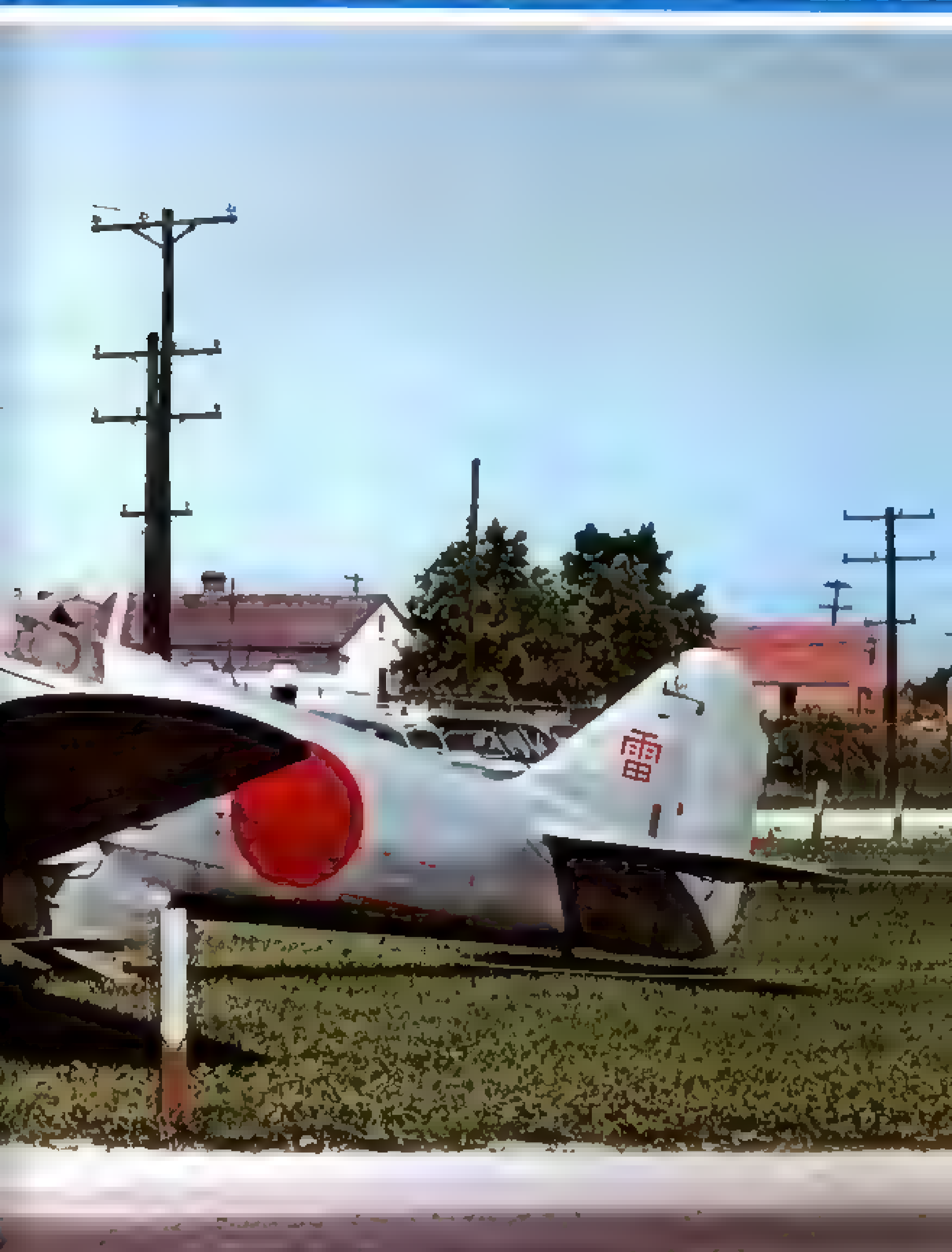
3式戦闘機"飛燕"

Ki 61 I Hien of No 55 Sentai Aug 1945

[illegible]






雷

ノースアメリカン F-82 ツイン・ムスタング

North American P 82 Twin Mustang



XF 82 [illegible] prototype

[illegible]

長距離兼掩護戦闘機のテストに使われたP-82B「ベティ・ジョー」号。同機は1947年2月[illegible]ロバート・サ[illegible]カ中佐[illegible]ジョン・[illegible]アード中尉で操縦[illegible]ハワイからアメリカ本土のニューヨークまで約5,000マイル（8,045km）を[illegible]時間[illegible]で飛んで[illegible]る。写真はテ[illegible]の出発[illegible]向かってオアフ島で整備中のもの。主翼下に[illegible]310ガロン燃料タンク[illegible]を[illegible]ド[illegible]最大離陸重量を[illegible]もオ[illegible]る両側[illegible]翼下[illegible]でテスト[illegible]であった。同機は現在デイトンの空軍博物館に展示されている。

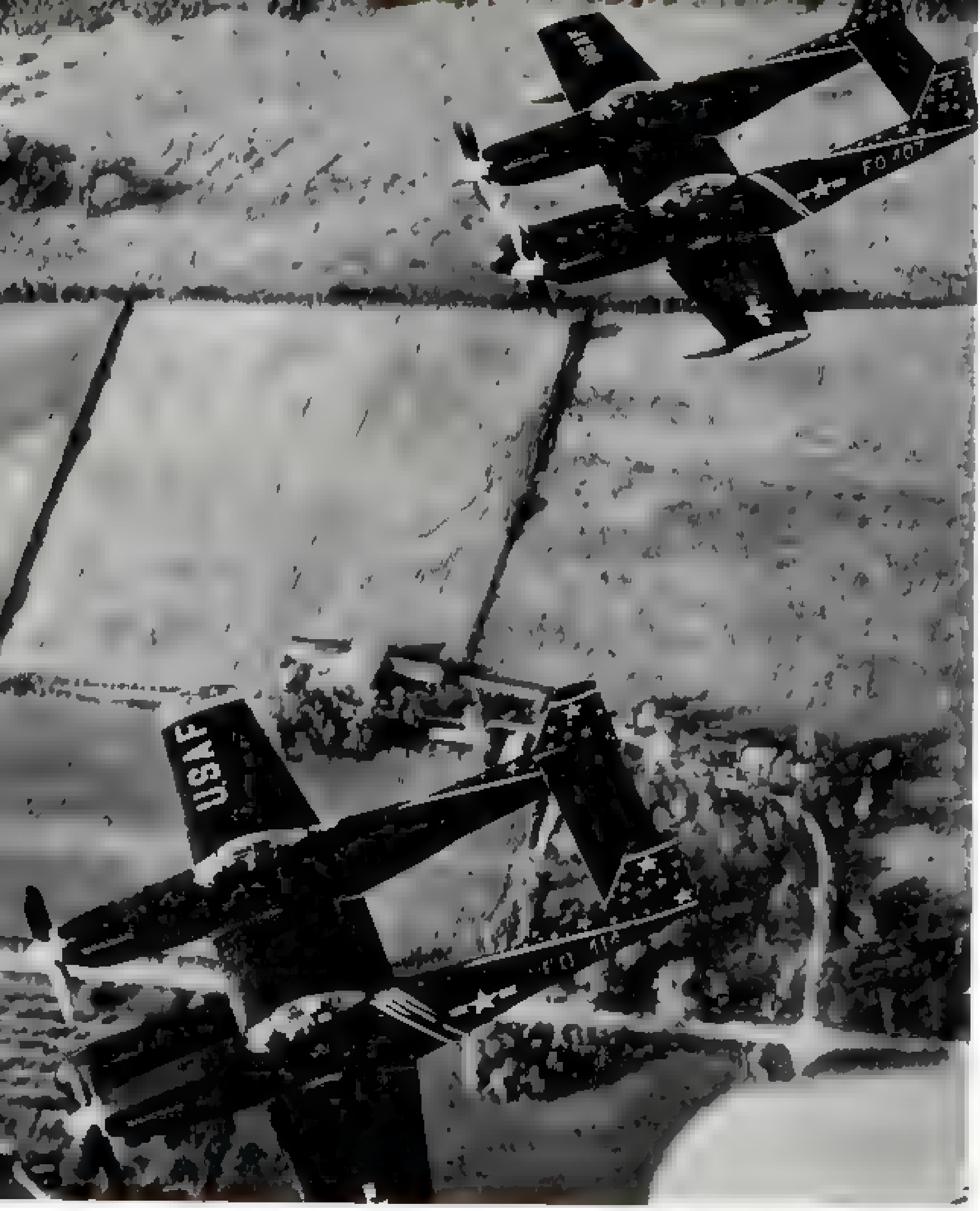
[illegible] P-82B Betty Joe







爆撃機を援護の任務を終えて帰投するP-51Dムスタング。編隊を解いて着陸に入る直前のスナップである。ヨーロッパ戦線で活躍した第8空軍第361戦闘大隊第375戦闘中隊の各機。
US Army Photo



F-82F of 52nd All Weather Fighter [illegible]

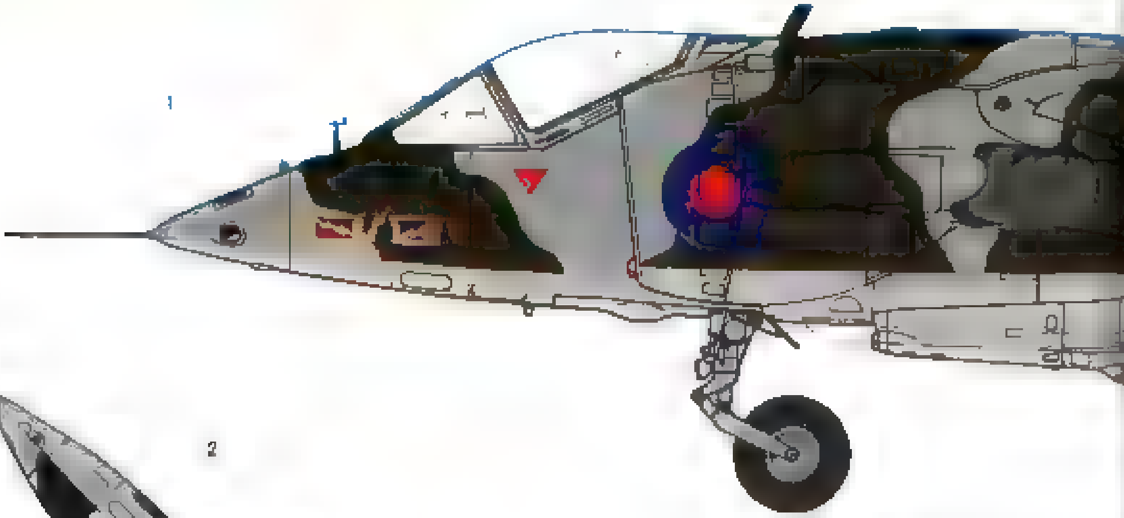
[illegible]ヨーク州[illegible]チェル空軍基地を本拠とする第52全天候戦闘飛行連隊所属のF-82F[illegible]ムスタング。夜間戦闘機型のF-82F[illegible]は中央翼下[illegible]の上に大きなナセルを[illegible]を格納[illegible]F型はAPS-4[illegible]型の[illegible]CP-720[illegible]場合左側胴体の席が[illegible]右側の席[illegible]操作手用[illegible]改造されて[illegible]戦後開発された[illegible]G型[illegible]

[illegible]イン・ムスタ[illegible]は[illegible]600HP[illegible]装備[illegible]右[illegible]である[illegible]として1948年7月から[illegible]F-82[illegible]新[illegible]任務を[illegible]F型[illegible]機は[illegible]アラスカ方面[illegible]配備され[illegible]改造を受け[illegible]ムスタングの最終[illegible]82[illegible]である

[illegible]第68全天候戦闘飛行隊[illegible] [illegible] Weather Fighter [illegible]



1



2



HAWKER SIDDELEY GR. MK 1 HARRIER

レベルカラー



3



4



5



レベル資料集

ホーカーシドレー　ハリアー

HAWKER SIDDELEY HARRIER



キットの紹介

レベルの1/32　　ト　ファイタ　　　　スの第3弾　　4　ア　　　　ラ　　　　が新発売されたもの　　　　　　　ア　　デラックスキットである。

ジェット噴射ノズルが回転する特殊なエンジンも内蔵して　　　　また精巧な　　　トもす　　キャ　　は開閉式　な　　フィ　　主脚　補助車輪は引込み式　　　　る。

エ　　　部　　　ナは簡非　て　　エアブ　　　キも開閉　　　　も明　　　　　　　　翼部　　　　　　の　翼下　アクセサ　　は　　　　　ト　増槽2個　　ケット弾　　ト　個　　　　　　ク　放　　る。

付　　　　　　　デ　　も　　詳細　　　　　　　レベル　　　のもの　　　　　テ　カ　　ル　英空軍、アメリカ海兵隊　　　　　カラー　塗装説明図が付属　　る。

塗装　　て

　　英空軍第　　　　　　　　　　　属機で、ドイツ　　　ラト　　　　　いる機体である。　カムフラージュ　　　　　　　　　34079　　　ク　　　6　　　　　　付近　色　　　　　　　　　　　　25　　　　部合わせ　　　　　　　　　　　　ク　　の　　　下面はライト　　　　　　　　　　　　　　　　　カラ　　　　　　　　　　塗装　る。

以下図5までの機体も　　これと同じ標準塗装であり、下面は図2　示す　　　　　る。英空軍機の場合は翼下面の　　　　ル　　　　　も　それぞれ　　き　　　　　　アメリカ海兵隊機の場合は主翼左上面に国籍マーク、右　面　　MARINE　文字があり、翼下面は右下面　　　　　に国籍マークがある。図3は上面形で、なかなか魅力的な仕上りを示す好例。

図4はアメリカ海兵隊のAV-8Aで、第542攻撃飛行隊所属機　　の機体はアンテナ柱が付いて　るのが目立　　　　取付　　　　なる。エ　　　　ムはファントム　　　　　　　　　るVMA 542のタイガー　　　　　　　　前の機のものと推定される。

図5は英空軍第　スコードロン所属機で、カムフラージュは図1と同じである。

現在、英空軍機は第　3、4、20スコードロン等に配属されているが、本稿締め切りまで　　　の資料を入手すること　できなかった。次の機会に当資料室よりその　　詳細をお伝えする予定である。

イラスト・解説　　　　　男

[illegible]



3式戦闘機

飛燕

Ki61 test-manufacture models.









〔上〕所沢飛行学校の飛燕1型。同学校の所属機は方向舵に横帯を1本入れて、その上にひらがなを記入してマークとしていた。

〔下〕同じく飛燕1型で、本機の流麗な姿態、その特徴がもっともよくうかがわれる角度の写真である。

〔右上〕本土防空戦に活躍した飛行第244戦隊所属の飛燕1型。プロペラをまわして機体から滑走路へ向うところ。

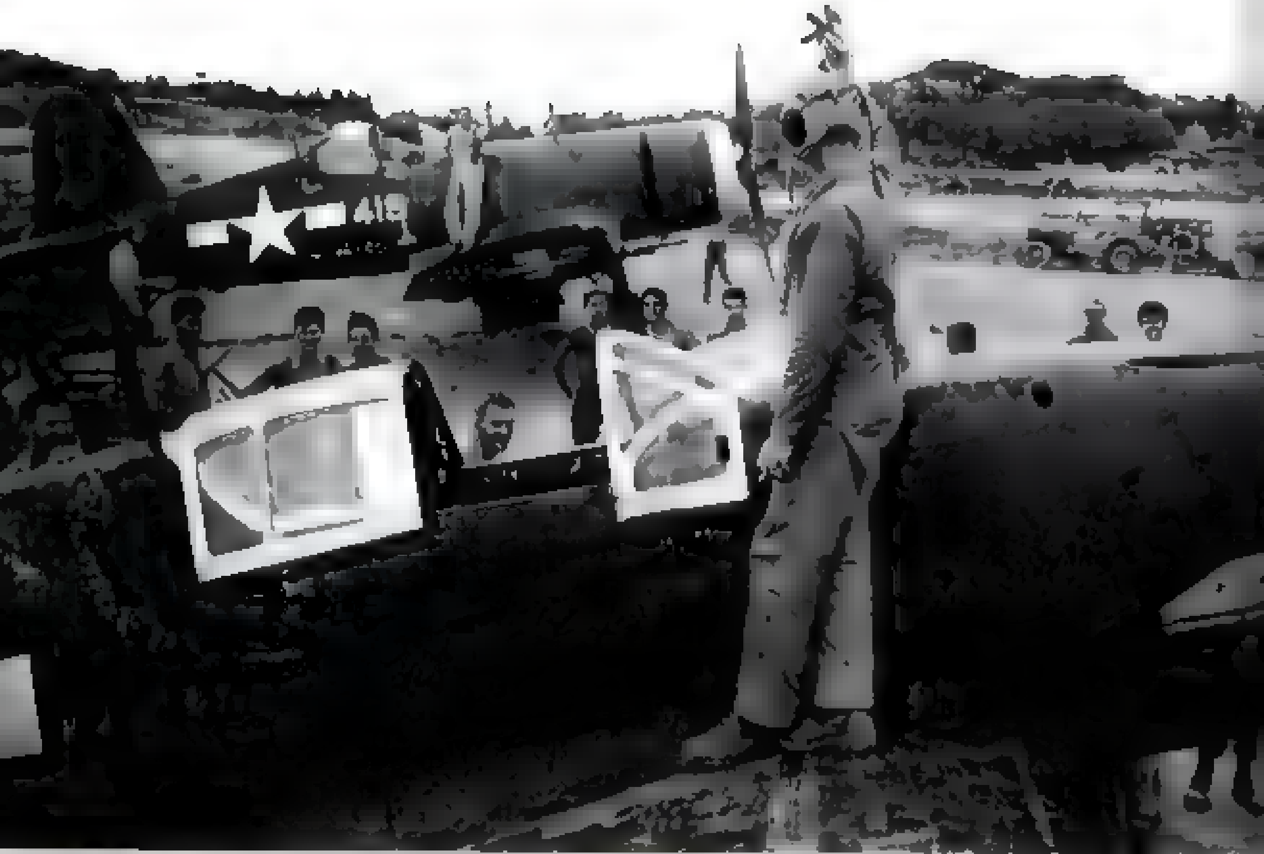
〔右下〕終戦時に立川基地内に放置された飛燕1型。当時進駐してきた米軍の一兵士が撮影したスナップである。(photo by C M Daniels)



Ki61-I Hien of No.244 Sentai Chofu Airfild







（上）沖縄で米軍に鹵獲されて飛行テストされた疾風1型。手前の機体がそれで、後方は飛行テストをエスコートして一緒に飛んだ米海兵隊のコルセア。1945年6月21日の撮影。

（下）これも沖縄で米軍の手に入った疾風1型で、ネットでおおった掩体のなかで米軍機の攻撃を受けて飛行不能となったもの。1945年4月2日の撮影。



日本陸軍の誘導ミサイル
イ号1型甲



Noted by R.C Mikesh

母機のキ67飛龍の胴体下に吊された三菱イ号1型甲誘導弾。投下テスト飛行にそなえて準備中。

An Army Test Engineer checks his watch for take off time for another test launch of the I Go 1A guided missile secured to the release rack of the Ki.67 Hiryu.

(本文148ページ記事参照)



太平洋戦争も後半に入った昭和19年秋、陸軍ではイ号と呼ばれる誘導弾を試作して発射テストを行なった。目標の近くで母機から発進させて、無線操縦で誘導、命中させるという、いまでいう誘導ミサイルの原型であった。三菱製のイ号1型甲 川崎製のイ号1型乙と[illegible]つのタイプが造られ、大戦末期の20年5月ごろまでテストがつづけられたが、ついに実戦に使われる[illegible]とはなかった。[illegible]に掲載したのは1型甲の実験中の珍らしい写真で、戦後米軍に押収されたものの一部である。本文記事とあわせてごらんください。



〔上〕飛龍の爆弾倉に、上部の誘導用無線装置格納部を押し込むようにして吊されたイ号1型甲。主翼の全幅は3.60m、全長5.77mで 特呂1号3型液体ロケット（推力240kg）を積んでいた。

〔右〕テスト飛行発進にそなえて最後の点検。福生基地での撮影と思われる。

↑→ View showing I-Go-1A in ferry position under Ki.67 Hiryu is presumably taken at Fussa Air Base, now Yokota.

↑→ View showing I-Go-1A in ferry position under Ki.67 Hiryu is presumably taken at Fussa Air Base, now Yokota.







〔上・右〕これも福生基地で発進準備中のイ号の母機キ67飛龍。イ号1型甲は総重量が1,400kg。飛龍は爆撃装置や不要品をとりのぞくと　1型甲1基を積んでも搭載量に余ゆうがあった。

↑ The I-Go-1A guided missile having but a 3.6m wing span is dwarfed by the Ki 67 Hiryu as the mother plane.

⇒ Ground crewmen make last minute adjustments on the I-Go-1A about to be carried aloft by the Ki 67 Hiryu.



The Ki 67 Hiryu carried only one 1400 Kg I-Go-1A weapon because of over weight and size with two missiles.

⬇ Japanese Army Technicians service the I-Go-1A missile before attaching it to the mother plane.





（上）イ号の特呂1号3型ロケットは、燃料として過酸化水素液と過マンガン酸ソーダ液を使ったが、その貯蔵庫は村山の山中に穴を掘って造られた。

（左）ドリ　に乗せられたイ号1号甲と右は川崎製のイ号1型乙。母機にとりつける前の2基を点検中。

⬆ Due to the dangers associated with rocket fuels, an underground storage facility was constructed. Here workmen dig into the hillside at Murayama, north side of what is not Yokota Air Base.





〔上・右〕イ号1型甲を吊して飛行中の飛龍の珍らしいスナップ。写真上は琵琶湖の投下テスト場に向うところ、右は1型甲を抱いて離陸直後のシーンである。発射テストは水戸沖や真鶴沖の海上で行なわれたが、のちに琵琶湖沖に舞台を移してつづけられた。

➡ Mitsubishi Ki 67 Hiryu shortly after takeoff with I-Go-1A guided missile attached to bomb bay.

⬆⬇ The lethal I-Go-1A missile can be seen attached beneath the Ki-67 as it proceeds to the test range over Lake Biwa, near Kyoto.



【上・右・下】琵琶湖投下テスト場のイ号誘導弾母機飛龍。琵琶湖では湖上の沖の白石を目標として実験した。写真下は投下直前のシーンで　イ号1型甲は母機からやや下方の位置にセットされているのがわかる。

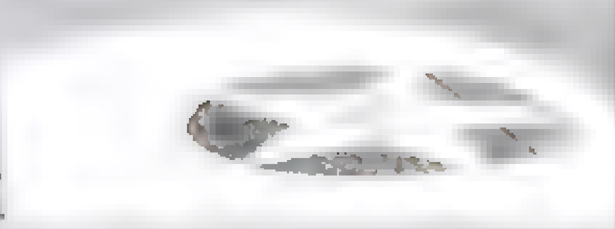
⬇ Just prior to launching, the I-Go 1A missile is extended downward for extra clearance from the mother plane Ki.67 as shown in this picture



A Ki.67 Hiryu flying over Lake Biwa near Kyoto. One of the test targets for the missiles consisted of a small rock island near the edge of the lake.







ブリュスター バッファロー

第2次大戦機アルバム

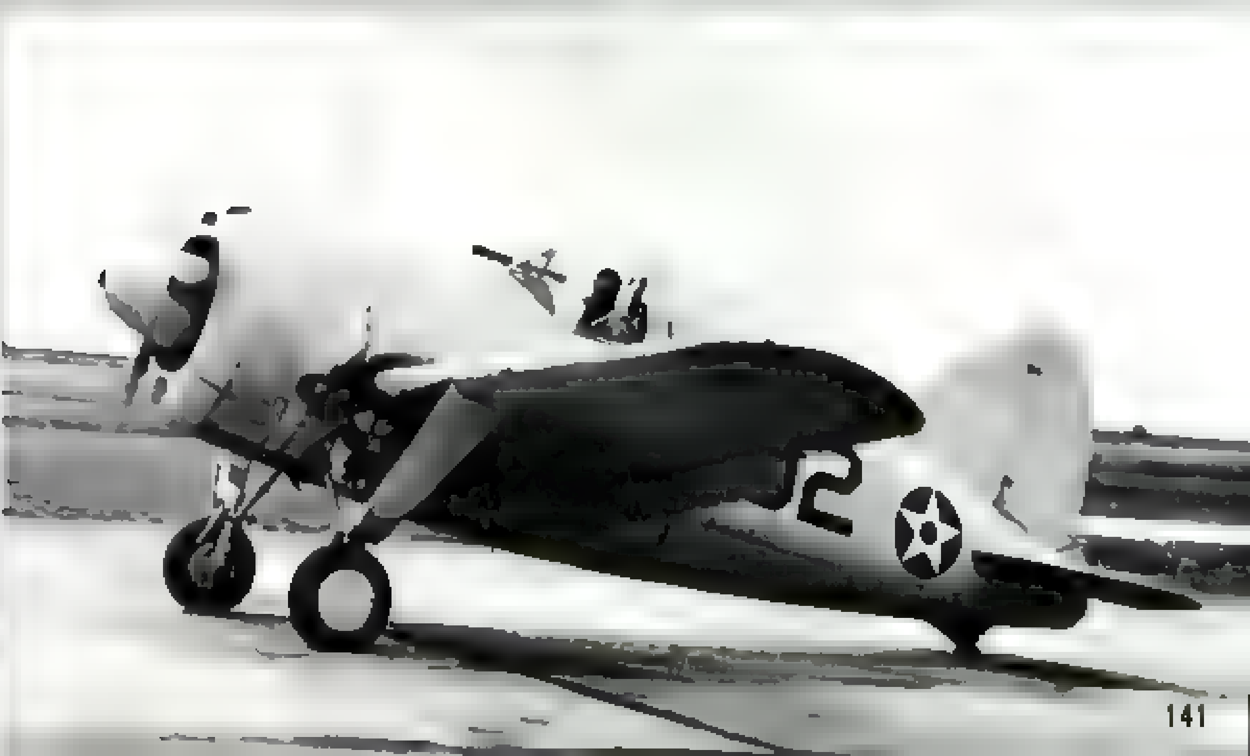
ブリュスターF2Aバッファロ は、アメリカ海軍で最初の単葉の制式艦上戦闘機。開発が始められたのは1935年で、短胴、頑丈な中翼機。スプリットフラップ（開きフラップ）をそなえ、主脚は油圧の引込式、尾輪も半分引込むという当時としてはざん新な機構の機体であったが、高空性能が悪く、空戦性能も期待したほどでなく、降着装置に難があって、艦上戦闘機としては成功作とはいえなかった。アメリカ海軍では海兵隊を含めて本機でわずか3個戦闘中隊を編成したにすぎなかった。

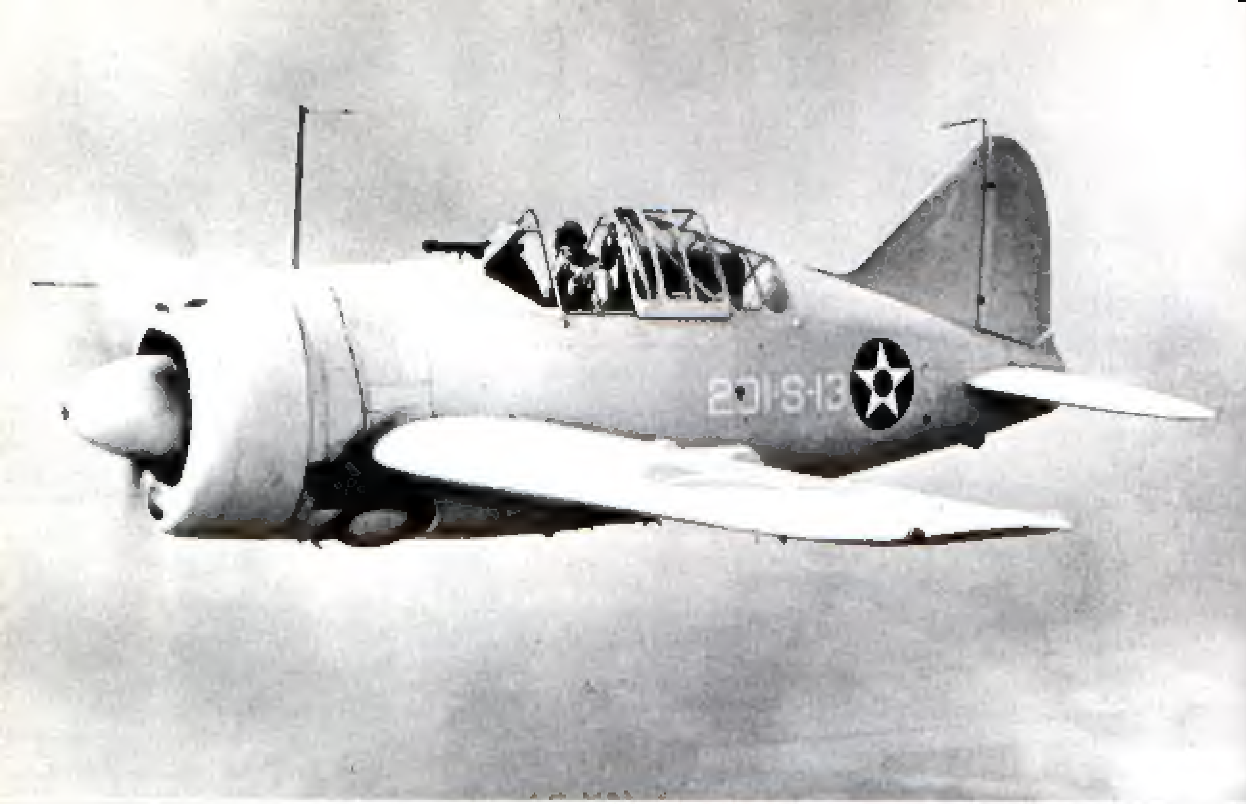




バッファローはアメリカ海軍のほかに、陸上機としてイギリス、オランダ空軍にも装備され、大戦緒戦にビルマ、マレー方面で日本の陸海軍機と戦っているが、当時最強の練度を誇る日本の戦闘機部隊の敵ではなく、1942年3月ころまでに全機が無残な最期を遂げている。さらに本機はフィンランド空軍にも援助機として引き渡されて、ソ連との国境紛争に投入されているが、むしろこれが本機にとってもっともはなばなしい活躍でもあった。今回はアメリカ海軍機を中心にご紹介することにしよう。

[左ページ上]1937年12月に初飛行したバッファローの原型1号機XF2A-1。ライトXR-1820-22(950HP)エンジンを積んで、機首に12.7mmと7.7mm機銃装備。のちに主翼にも12.7mm機銃2梃がつけられるようになった。同機は翌38年4月、艦上テスト中にエンジン故障で不時着、エンジンをR-1820-40(1,200HP)に換装してXF2A-2に改造された。(同下)XF2A-2。エンジンを換装したほか-2では垂直尾翼の形がかわり、3翅のプロペラが電動式から油圧式のものとなった。量産型のF2A-1は1938年6月に54機が発注され、翌39年7月から部隊に引渡された。(上・下)1940年9月から部隊に配備されたF2A-2の量産型。米海軍では同型機を43機装備している。





〔上〕VS-201（第201偵察中隊）が装備したＦ２Ａ-2。護衛空母ロングアイランドに配属されていた同中隊は、1941年末に本機を少数機受領して東海岸で任務についている。そのほか米海軍のバッファロー部隊は、1939年末に、初めて11機のＦ２Ａ-1を受領した空母サラトガのＶＦ-3（第３戦闘中隊）、つづいて1940年10月からＦ２Ａ-2を受領した空母レキシントンのＶＦ-2（第２戦闘中隊）それに41年末からＦ２Ａ-2と-3数機を受領した海兵隊のＶＭＦ-221（第221海兵戦闘中隊）のみである。ＶＦ-3は１年たらずでＦ２Ｆ-2に機種改変、さらに１年ほどで、ＶＦ-2とともにＦ２Ａ-3に改変している。-2は最高速度では-1に優ったが、そのほかの性能では-1と大差がなかった。1941年１月に108機発注された-3は、エンジンは-2と同じだが、主翼付根前方の胴体を１フィート延長して燃料容量をふやし、タンクやパイロットの防弾を強化するなどの改造をしている。

〔下〕給油中のＶＭＦ-221に配備されたＦ２Ａ-3の１機。同中隊はバッファローで闘った最後の部隊。1942年７月のミッドウェー海戦では、20機のＦ２Ａ-3を持って日本機を迎え撃ったが、全滅の悲運をなめている。





エアラインの翼

SABENA　ベルギー航空　⑦

1947年6月にブラッセルからアメリカへの路線を開設したサベナは、つぎつぎと路線のアシをのばし、今日の路線網のパターンをきずいていった。1953年には、ヘリコプタによる乗客輸送の国際路線も計画、シコルスキS-55とS-58で運航を開始したが、採算があわずに1966年に廃止している。

(上)DC-3の後継機として、1956年に購入したコンベアCV-440メトロポリタン。サベナでは本機を9機購入している。(下)1957年に導入したダグラスDC-7C。ジェット機時代への過渡的なエアライナーとして登場。まもなく路線を退いたDC-7C。サベナでは貨物型2機を購入して、1960年にボーイング707と代替させている。



日の丸をつけた ドルニエの翼たち





大型飛行艇の設計で知られるドイツの航空機メーカーの名門ドルニエ。同社が造った飛行機で最初に飛んだのはRSII飛行艇。1916年6月30日のことであった。すでに59年余の才月が流れたが、この間、数多くの軍用・民間機を設計製作。そのなかには日本に輸入されて、戦前の日本の航空界に大きな影響を与えた機体も少なくない。

〔上・左〕大正13年(1924年)に輸入したドルニエ・ワール飛行艇。ワール飛行艇は13年から昭和5年にかけて、4機が輸入されている。写真はイタリア製のワールで、日本航空株式会社(川西)が輸入したもの。ロールスロイスイーグル水冷V型12気筒エンジン(360HP)×2、全幅22.50、全長17.45m、主翼面積96m²、全備重量4,620kg、最大速度185km/h、乗員4名のほか約10人の乗客が乗れた。

〔下〕大正15年(1926年)に朝日新聞社が輸入したドルニエ・コメット旅客機。川崎が部品を輸入して組立てたもので、3機が造られている。写真の機体は朝日新聞社で「空飛ぶ編集室」として使われた1機。同社の東西定期航空会の使用機として東京〜大阪間の旅客や郵便輸送にも活躍している。独製のBMW-Ⅵ(500馬力)エンジンを装備して、全幅19.6m、全長12.4m、総重量3,700kgの最大速度185km/h、乗員2名のほか、乗客は4名。





Dornier "wings" with Hinomaru national insignia. P. 146～147: Dornier War flying-boat (Kawasaki, 1924); Dornier Comet passenger plane (Asahi Shimbun, 1926); Dornier Do-D (failed in Navy exam., 1925); Dornier Do-N bomber (Jap. Army Type 87 bomber, 1927).

【上】双フロートをつけて、水上偵察爆撃機に改造されたドルニエDo-D。大正14年に海軍の審査を受けたが失格している。なお、陸上型のDo-Cコメットも大正13年に陸軍の軽爆として審査を受けて、失格となっている。
【下】川崎がドルニエとの技術提携で設計製作したDo-N重爆撃機。昭和2年春に、丁式重爆の後継機として87式重爆撃機の名称で陸軍に制式採用されている。



【下】上と同じく87式重爆撃機。陸軍で最初の全金属製単葉の重爆。爆弾搭載量は本機で初めて1トンの"大台"にのった。全部で28機が造られている。川崎BMW-6(450馬力)×2、全幅26.80m、全長18m、全高5.85m、全備重量7,700kg、最大速度180km/h。

